

日本人のスポーツ意識Ⅱ

下田 次雄* 池田 隆二*

Japanese Sense of Sports Ⅱ

Tsugio SHIMODA* Ryuji IKEDA*

(Received August 1, 1973)

Ⅰ. まえがき

スポーツは、人類とともに存在してきた。遊びにたわむれたいという古代からの人間の本能的な性向が、現在のスポーツの原型であり、そのような人間の遊戯的本能の所産をスポーツという言葉で呼ぶようになったのは、わが国では昭和になってからである。

スポーツの意味づけは、時代とともに移りかわり、そして現代のスポーツ意識へと発展してきた。洋の東西を問わず古代社会におけるスポーツ的な鍛練は、君主達の特権的な遊戯行事や、宗教上の儀式と密接に結びついていた。中世になるとスポーツは階級的となり、貴族の教養としての意味をもち、近代日本におけるスポーツも富強主義という政治的背景のもとで発展し、国民の中へ定着してきたといえよう。

現代日本におけるスポーツは、政治的背景のものは後退し、民主的な人間開発の手段として学校教育のなかで、その役割を担うようになった。しかし、現代の社会構造の変革にとともに、そこにあらわれてきたさまざまな現象は、スポーツの企業化であり、大衆化であり、高度化であり、そして自らスポーツを楽しもうとする欲求の深まりなどであると思われる。

本研究は、このような現代におけるスポーツの諸現象を人々がどのように考えるかを知るために、種々の視点から調査し、資料の分析を進めることによって、現代の日本人のスポーツ意識の傾向と構造を明らかにすることにある。

過去の研究結果は、スポーツ意識の変容過程をとらえる目的で、1971年に沖縄県民を対象としたスポーツ意識について報告した¹⁾。調査の時期はスポーツの未発達な

地域ともいえるべき現況下での沖縄県民への調査である。その結果、沖縄の高校生のスポーツ意識はスポーツの非実利的価値観、スポーツの享受目標主義およびスポーツの大衆化に志向するということの傾向をみることができた。

本稿は、高校生の運動部選手と運動部に所属しない一般の生徒のスポーツ意識のちがいを明らかにすることを目的としている。その結果、本稿でみる高校生のスポーツ意識は、一般的にはスポーツの未発達な現況下にあった沖縄の高校生のスポーツ意識の傾向と類似するという知見を得ることができた。

Ⅱ. 目 的

高校生の運動部選手と一般生徒のスポーツ意識のちがいを明らかにする。

Ⅲ. 研究の方法

(1) 調査項目の作成

スポーツ意識を測定する調査項目は、次の3つの観点より作成した。

①スポーツ行動が自分の利益になるかどうかを、先ず考えるというスポーツの実利的な面に価値を認めるのか、それとも実利的な目的を離れて、スポーツそれ自体を目的とし、結果や利益を期待しないという無償の行為としてのスポーツの非実利的な面に価値を認めるのかという「スポーツの価値観」についての調査、7項目、②勝つことをスポーツの最終目標とするスポーツの勝利目標主義か、それとも勝敗は、スポーツの本質的な部分ではないと考えるスポーツの享受目標主義かという「スポーツの目標観念」についての調査、5項目、③しばしば矛盾し、対立するものとして登場するスポーツの大衆化と高度化のどちらを優先するものかと考えるかという「スポーツの志向性」についての調査、3項目の計15項目である。なお、本稿に関する調査票の具体的内容については末尾に付録として示す。

* 保健体育系列 (Department of Liberal Arts and Sciences-Health and Physical Education)

(2) 調査の方法

＜調査の対象＞運動部選手：1971年全国高等学校ハンドボール選手権大会で、男女共1位から8位までの入賞校の選手を対象とした。その内訳は男子選手98名、女子選手109名の計207名である。

一般生徒：運動部に所属しない一般の生徒は名古屋市内に所在の学校より割当による有意選択で、男子3校、158名、女子3校、205名の計363名である。

＜調査の方法と時期＞調査は質問紙法により、ハンドボール選手は1971年8月、一般生徒は1973年2月に実施した。

Ⅳ. 結果と考察

(1) 反応の得点化による意識の傾向

調査項目の反応を点数化することによって、スポーツ意識の一般的な傾向をみることにした。それぞれの項目は3反応形式で整理した。点数化による配点は、次のとおりである。「スポーツの価値観」では実利的価値観に賛成する反応に0点、中間的反応に1点、非実利的価値観に賛成する反応に2点を配した。「スポーツの目標観」では勝利目標主義に賛成0点、中間1点、享受目標主義に賛成2点、「スポーツの志向性」では高度化志向に賛成0点、中間1点、大衆化志向に賛成2点のそれぞれを配点した。したがって、得点の巾は「スポーツの価値観」では調査7項目であるので0点～14点となり、「スポーツの目標観」では0点～10点、「スポーツの志向性」では0点～6点となる。つまり、得点が高いほどスポーツの非実利的価値観、享受目標主義、大衆化志向を意味し、逆に得点が低いほどスポーツの実利的価値観、勝利目標主義、高度化志向を意味する。

この得点にもとづいて、それぞれの得点の平均を選手と一般生徒別、さらに男女別に算出し、算出された得点の平均から、一般的な意識の傾向をみることにした。その得点の平均を示したものが表1である。

表1 得点の平均

		選 手			生 徒			全 体 計
		男	女	計	男	女	計	
価値観	0点	9.38	10.10	9.76	9.52	9.50	9.50	9.63
	14点	1.97	1.45	1.75	2.06	1.78	1.81	1.78
目標観	0点	5.17	6.44	5.76	6.15	6.90	6.58	6.17
	10点	2.61	2.00	2.46	2.29	1.76	2.04	2.25
志向性	0点	3.57	3.30	3.51	4.08	4.19	4.14	3.83
	6点	1.60	1.54	1.56	1.54	1.69	1.62	1.59
N		98	109	207	158	205	363	570

表1を通覧してみると、スポーツの価値観では、全体

がスポーツの非実利的価値観に立ち、なかでも、女子選手にもっともその傾向が強い。スポーツの目標観では、男子選手にスポーツの勝利目標主義を支持する傾向が強い。スポーツの志向性では、選手がスポーツの高度化に、一般生徒が大衆化に志向するという一般的な傾向をよみとることができる。

次に、調査項目の反応を分析することによって、意識の構造と傾向をみることにする。

(2) スポーツの「価値観」、「目標観」、「志向性」に関する項目の反応分析

スポーツの価値観、目標観および志向性についての反応を分析するに際して、次の3つの側面より反応の有意差をみることにした。すなわち、「選手と一般生徒」、「男子選手と女子選手」、「男子生徒と女子生徒」についてである。それらの関連はカイ自乗検定により、その結果を表の下に記した。

(i) スポーツの価値観

スポーツの価値観に関する調査結果は、表2から表8に示した。選手と一般生徒、選手の男女間および一般生徒の男女間の反応には有意差なし、いずれもスポーツの価値意識は高い。

表2 スポーツ活動の意欲

	選 手			生 徒			全 体 平均
	男	女	平均	男	女	平均	
意 欲 的	65	70	67	68	65	66	66
どちらともいえない	27	27	27	27	31	30	29
消 極 的	8	3	6	5	4	4	5
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

n.s

表3 スポーツする気持

	選 手			生 徒			全 体 平均
	男	女	平均	男	女	平均	
わかる	73	76	75	76	62	68	71
わからない	27	24	25	24	38	32	29
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

n.s

表4 トレーニングの意義

	選 手			生 徒			全 体 平均
	男	女	平均	男	女	平均	
無 意 義	8	0	4	8	6	7	6
わ か ら な い	19	22	21	21	25	23	22
有 意 義	73	78	75	71	69	70	72
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

n.s

表5 運動部員へのアドバイス

	選 手			生 徒			全体平均
	男	女	平均	男	女	平均	
迷わずに ひかえめに	65	81	73	64	62	63	68
	35	19	27	36	38	37	32
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

n.s

表6 早稲朝野球

	選 手			生 徒			全体平均
	男	女	平均	男	女	平均	
賛 成	78	79	78	66	78	73	75
感 じ ない	20	21	20	33	18	24	23
反 対	2	0	2	1	4	3	2
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

n.s

表7 アマチュア選手の宣伝利用

	選 手			生 徒			全体平均
	男	女	平均	男	女	平均	
賛 成	29	12	19	27	25	26	26
わからない	21	28	26	27	27	27	24
反 対	50	60	55	46	48	47	50
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

n.s

表8 スポーツの手段化

	選 手			生 徒			全体平均
	男	女	平均	男	女	平均	
賛 成	23	9	16	14	12	13	14
どちらともいえない	37	48	43	36	35	35	38
反 対	40	43	41	50	53	52	48
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

n.s

ところで、この結果の中で注目されるのは、選手の中で表3のスポーツする気持について、男子選手の27%、女子選手の24%の者は、その気持が「わからない」といっており、また、表4のトレーニングの意義では男子選手の19%、女子選手の22%の者が、いずれもトレーニングの意義について「わからない」といっていることである。つまり、インターハイ上位入賞というチームの選手の中には、一般論としての「スポーツする気持」「トレーニングの意義」ではなく、実利的な目的を離れてスポーツそれ自体を目的とするような無償の行為としての「スポーツする気持」「トレーニングの意義」が、わからないとする者があるということである。

そこで、価値観を測る項目について、それらの選手と選手全体の反応を対比し、両者の反応の差を検定した結果、1%レベルで有意な差が認められた項目を図示したのが図1から図5である。

図でみるように、スポーツする気持、トレーニングの意義がわからないとする選手が他の選手の反応とくらべ

図1 スポーツの手段化(%)

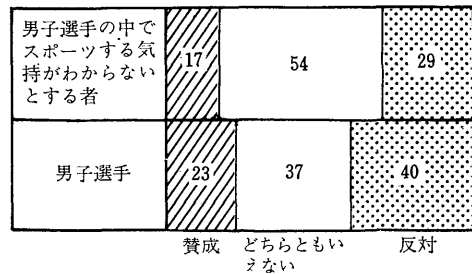


図2 アマチュア選手の宣伝利用(%)

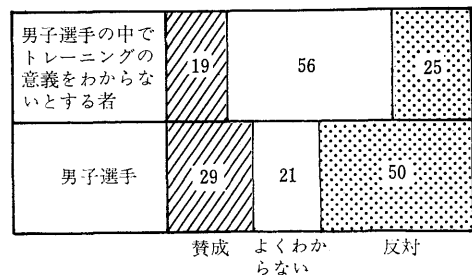


図3 スポーツの手段化(%)

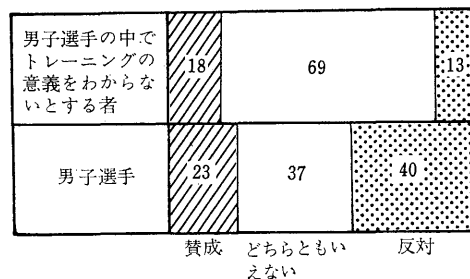


図4 運動部員へのアドバイス(%)

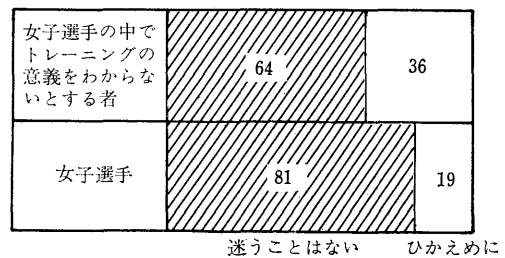
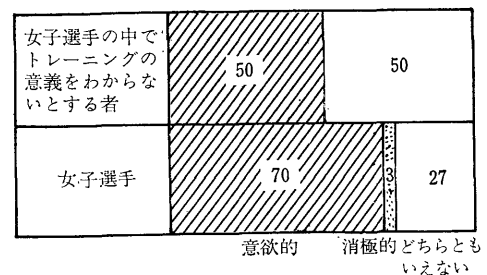


図5 スポーツ活動の意欲(%)



明らかにちがう点は、各項目とも「わからない」「どちらともいえない」の比率が高いということである。

これらの選手の価値意識は、スポーツの非実利的価値を優先しながらも、他の選手にくらべ、その意識の度合が弱いということである。

次に、表2から表6まででは選手、一般生徒ともスポーツの非実利的価値を優先する傾向が強かったが、表7のアマチュア選手の宣伝利用、表8のスポーツの手段化では両者とも、その傾向が弱まり、反応の分散が目につく。このことは、アマチュアに関する事象やスポーツの手段化にまつわるスポーツによる代償、いわゆるスポーツの企業化に対してどのように受けとめ、どのようにおしすすめるべきか、という問題についての困惑にあるのではないだろうか。

そこで、アマチュア選手の宣伝利用とスポーツの手段化で、「わからない」、「どちらともいえない」とする者の意識をさぐるために、それらの者と価値観を測る他の項目をクロスし、その反応をみることにした。

表9 アマチュア選手の宣伝利用とスポーツの手段化で「よくわからない」、〈どちらともいえない〉とする者の反応

	アマチュア選手の 宣伝利用で「よく わからない」とす る者の反応 (%)				スポーツの手段化 で「どちらともい えない」とする者 の反応 (%)			
	選 手		生 徒		選 手		生 徒	
	男	女	男	女	男	女	男	女
スポーツ活動は意欲的	65	86	79	57	68	73	64	68
スポーツする気持はわかる	71	62	65	55	63	81	77	59
運動部員へのアドバイス、迷うことない	63	89	57	70	71	83	64	66
トレーニングは有意義	57	90	64	66	60	71	65	68
早朝野球は賛成	67	83	62	80	76	81	63	80

表9は、アマチュア選手の宣伝利用で、「わからない」、スポーツの手段化で、「どちらともいえない」という者のスポーツの価値観を測る項目への反応のうち、非実利的価値を認める反応についての比率を表示したものである。

どの項目も、スポーツの非実利的価値を認める反応の比率は過半数に達している。中でも、女子の選手にその比率が顕著に高い。したがって、アマチュア選手の宣伝利用とスポーツの手段化にとまどいをもつ者も、しつかりとしたスポーツの非実利的価値観が確立されている者が多いということが判明した。

以上、スポーツの価値観については、全体としては非実利的価値観に立っており、なかでも、女子の選手にその傾向が強い。つまり女子の選手はスポーツの実利的な面を度外視して、純粹にスポーツ活動に精進していると

いえる。

(ii) スポーツの目標観念

スポーツの勝利目標主義か享受目標主義かを測る項目の反応については、表10から表14に示した。

表10 スポーツに対する考え方

	選 手			生 徒			全体 平均
	男	女	平均	男	女	平均	
勝利第一 気晴し	41	36	38	17	9	12	22
	59	64	62	83	91	88	78
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

選手と生徒P<.01

表11 国体臨時教員の導入

	選 手			生 徒			全体 平均
	男	女	平均	男	女	平均	
賛 成	35	13	23	15	15	15	18
反 対	65	87	77	85	85	85	82
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

男子選手と女子選手P<.01

表12 オリンピック参加の意義

	選 手			生 徒			全体 平均
	男	女	平均	男	女	平均	
勝つこと 勝敗は別	48	25	36	35	11	22	27
	52	75	64	65	89	78	73
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

男子選手と女子選手P<.01

男子生徒と女子生徒P<.01

表13 オリンピックでの優勝

	選 手			生 徒			全体 平均
	男	女	平均	男	女	平均	
すばらしい 勝たなくてよい	82	94	89	87	96	92	91
	18	6	11	13	4	8	9
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

男子選手と女子選手P<.01

表14 ファンの心情

	選 手			生 徒			全体 平均
	男	女	平均	男	女	平均	
勝ってもらいたい 敗けても満足	37	18	27	36	22	28	28
	63	82	73	64	78	72	72
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

男子選手と女子選手P<.01

表10は、スポーツに対する考え方を示すものである。勝つことを第一とする反応の比率は一般生徒よりも選手に有意に高い。表11の国体の臨時教員の導入については選手の男女間に有意差あり。表12のオリンピック参加の意義については、「勝つことにある」とする選手の比率は男子が女子よりも、一般生徒も同様、男子が女子よりも有意に高い。表13のオリンピックでの優勝については

「それほどまでして勝ってくれなくてよい」とする選手の男女間に有意差がある。ここで注目されるのは、他の項目に対する反応の傾向から見ると、この項目では「それほどまでして勝ってくれなくてもよい」とする者は男子より女子の方に多いように思われるのがだ、実際はその逆となっている。オリンピックでの優勝の瞬間をテレビなどで見聞する時、女子は男子よりも感動の度合いが強いということがいえるのではなからうか。次にスポーツ選手でオリンピックでの優勝を特に評価しないという意識の構造は、どのようなものであるかという疑問が湧く。そのために、「勝ってくれなくてもよい」とする選手の男子18%の者について、目標観念に関する項目の反応をみることにした。

結果は、スポーツは気晴し、体力作りあるいは仲間づくり、87%，オリンピックは勝敗にこだわることはない、67%，国体の臨時教員の導入には反対、87%と、いずれもスポーツの享受目標主義を優先している。

スポーツ選手の中で勝利目標主義を主張する選手がある一方、同じスポーツ選手の中にも少数者とはいえ、スポーツの享受目標主義を主張する選手もみられた。後者のもつ意識は同好会レベルの選手にみられるスポーツ意識に類するものと思われる。

表14はスポーツファンの心情をみたものである。ここでも、選手の男女間に有意差が認められた。

表15 スポーツの目標観念についての関連表

※1%水準		スポーツに対する考え			
		国体臨時教員の導入	オリンピック参加の意義	オリンピックでの優勝	ファンの心情
選手と生徒		※	※	※	※
男子選手と女子選手		※	※	※	※
男子生徒と女子生徒		※	※	※	※

表15は、目標観念における反応の関連をまとめ、一覧表にしたものである。

スポーツの目標観念に関する項目で反応に有意差が認められたのは、選手と一般生徒の間よりもむしろ、インターハイ上位チームに所属する選手の男子と女子であった。

以上、スポーツの目標観念では、全体として、スポーツの享受目標主義を優先しながらも、女子よりも男子にスポーツは勝利第一とする傾向があり、なかでも勝つことへの執着心が高いのは男子選手といえよう。

(iii) スポーツの志向性

表16から表18までは、スポーツの大衆化志向か高度化志向かについての項目の反応を示したものである。

表16 国際競技場か小運動場か

	選 手			生 徒			全体平均
	男	女	平均	男	女	平均	
小運動場をたくさん国際競技場を	53	64	59	69	56	62	61
	47	36	41	31	44	38	39
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

n.s

表17 国や県の援助金

	選 手			生 徒			全体平均
	男	女	平均	男	女	平均	
代表選手に	14	9	11	4	9	7	9
県民全体に	86	91	89	96	91	93	91
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

n.s

表18 クラブの運動場使用

	選 手			生 徒			全体平均
	男	女	平均	男	女	平均	
優先せよ	62	73	67	59	34	45	53
制限せよ	38	27	33	41	66	55	47
計 (%)	100	100	100	100	100	100	100

選手と生徒P<.01

男子生徒と女子生徒P<.01

表16の運動場建設と、表17の国や県などが、スポーツのために金銭上の援助をする場合の反応については、有意差はない。表18は運動部の生徒が放課後、運動場や体育館を独占的に使うために、運動部に入っていない生徒はスポーツができない、それをどう思うかについての調査である。

ここでは選手と生徒、一般生徒の男女間に有意差が認められた。つまり、当然のことながら選手が生徒よりも有意に運動部の運動場使用を「優先せよ」としており、男子の生徒も選手同様、その使用を「優先せよ」と運動部優先には好意的である。一方、女子生徒は運動部の使用は「制限すべきである」という意識が強い。

表19 スポーツの志向性についての関連表

※1%水準		国小 際運 動 技 場 か	ク 場 使 用 の 運 動	国金 や 県 の 援 助
選手と生徒		※		
男子選手と女子選手		※		
男子生徒と女子生徒		※		

表19は、スポーツの志向性を測る項目の反応についての関連表である。有意差が見出せた項目はクラブの運動場使用についてであった。

以上、スポーツの志向性についてみてきたが、運動場の建設や国や県の援助金については、大衆化に志向する傾向がある。また、毎日の学校生活と直接関係する運動部の運動場の独占的使用については、選手は当然ながら、その使用を優先せよといい、男子生徒の意識も選手に近い。その反面、女子生徒は運動部の独占的使用を制限し、もっと一般生徒にスポーツをする機会をあたえよといっている。

V. まとめ

以上、高校生のスポーツ意識について、結果と考察を報告してきた。本調査によって得た所見をあげれば次のようになる。

1. スポーツの価値観では、選手と一般生徒の間には有意差はない。ともに、性別には無関係にスポーツの非実利的価値観に立っている。なかでも、女子の選手にその傾向が強い。

2. スポーツの目標観念では、選手も一般生徒と同様にスポーツの享受目標主義に立ち、有意差は選手と一般生徒の間より、むしろ選手の男女間にみることができた。つまり、男子の選手は女子の選手よりも勝利目標主義への執着心が強いということである。

3. スポーツの志向性では、選手も一般生徒もスポーツの大衆化に志向している。なかでも、女子の生徒に一貫してその傾向が強い。

スポーツの志向性では、一般的にそのような傾向にあるなかで、放課後、運動部が運動場を独占的に使用することについては、選手と一般生徒の間に有意差がみられた。それは、スポーツの高度化に志向する選手は、一般生徒よりも運動部の運動場使用は当然と考える傾向が強いということであった。

終りに、本研究に対して有益なご助言をいただいた、名古屋大学小林篤助教授に謝意を表します。また、本稿に関する調査にご尽力願った本学山崎正利講師、ならびに、調査にご協力を賜った、東邦高校教諭中山昭三、愛知高校教諭鹿島田正勝、相山女学園高校教諭加納孝雄、名古屋女子大附属高校教諭川崎学、中京女子高校教諭松本吉男、名古屋第一工業高校教諭牧野勝治の諸氏にお礼を申しあげます。

文 献

- 1) 池田隆二：日本人のスポーツ意識 1，沖縄県民の意識構造・中部工業大学紀要第8・B巻，49—58.1972.

〔付録〕 調査票の内容

① 街の店員さんや工員さんが、早朝から野球の練習や試合をしているのを見かけることがありますか、もし、あなたがそういう光景を目にしたら、どんな感じをもたれるでしょうか。

- 1 「いいことだなあ」
- 2 「バカな連中だ」と思う
- 3 別ににも感じない

② 学校の運動部員の中には、勉強とスポーツに生活のすべてをささげ、その他のことをやる時間のゆとりがほとんどないために「これでよいのだろうか」と悩む人もいます。そういう人にあなたが助言をするとなれば、それは次のどれに近いでしょうか。

- 1 君のいき方はまちがっていない。迷うことはない
- 2 スポーツを少しひかえめにして、時間のゆとりを作り出した方がよい

3 スポーツに青春をかけるなどおろかなことだ。スポーツはレクリエーション程度にやった方がよい

③ 「人間がいくら速く走っても、しよせん馬より速く走ることはできない。だから少しでも速く走ろうと懸命にトレーニングしたりするのはおろかだ」という意見もあります。あなたは、この意見に賛成でしょうか、反対でしょうか。

- 1 賛成
- 2 反対
- 3 よくわからない

④ イギリスの登山家が「なぜ山に登るのか」と問われて「山がそこにあるから」と答えた話は広く伝えられていますが、さて、あなたはそう答えた人の気持がおわかりになるでしょうか。

- 1 よくわかる
- 2 なんとなくわかる
- 3 あまりよくわからない
- 4 さっぱりわからない

⑤ あなたは、友人（あるいは学校の先生）に「ひまをみてはスポーツをやれよ」とすすめられたら、どんな気持をもちますか。

1 いろいろ事情はあるが、できるだけスポーツをやるようにしたい

2 スポーツをやれやれと言うのはおかしい。スポーツなどやる必要はない

- 3 どちらともいえない

⑥ 今年の2月、冬期プレ・オリンピックが北海道の札幌に開かれた際、外国のスキー選手が、スキー会社の商品名をつけて出場しました。あなたは、このようにアマチュアスポーツ選手が会社などの宣伝に使われることについて、どうお考えになりますか。

1 アマチュアスポーツ選手を利用した会社などの宣伝はやるべきでない

- 2 すこしぐらい宣伝に使われてもいいのではないかと

3 大いに選手を利用して宣伝すべきだ

- 4 よくわからない

⑦ スポーツ選手は、進学や就職に有利だからということ、一生懸命に選手になろうと努力をしている人もいます。あなたは、このことについて、どうお考えですか。

1 スポーツによって進学や、就職が有利になるなら、そんないいことはないから、選手になるよう大いに努力すべきだ

- 2 就職や進学が有利になるからといって、選手になる必要はない

3 どちらともいえない

⑧ スポーツをやる場合、人によって考えることがまちまちです。

あなたは、次の意見のうち、どちらを選びますか。

- 1 スポーツである以上、勝つことが第一であるので、勉強や仕事をすこしぐらい犠牲にしても、スポーツに熱中すべきだ
 - 2 スポーツは勝つことも大切かも知れないが、ひまな時に気晴らしや、体力づくりあるいは仲間づくりにやるべきだ
- ⑨ ごぞんじのように、全日本男子バレーボールの選手たちは、文字通り血の出るような猛練習をかさねて、みごとにミュンヘンオリンピックで優勝しました。このことをどう思いますか。
- 1 すばらしいことだ
 - 2それほどまでして勝ってくれなくてもよい
- ⑩ 「オリンピックで重要なのは、勝つことではなくして参加することである」とクーベルタンは言いました。あなたはどのようにお考えになりますか。
- 1 参加したからには、何が何でも勝たねばならぬ
 - 2 ベストをつくることが大切で、勝ち負けにこだわることはない
- ⑪ 今まで国民体育大会を開いた県では、勝つために強い選手を多勢、臨時に教員として採用したり、他の県から、転勤させたりしたようなことが、かなりありました。このことをどうお考えになりますか。
- 1 勝つためには仕方ないことだと思う
 - 2それほどまでして勝ってもらいたいとは思わない
- ⑫ 巨人戦で広島のアニ屋投手が力投しましたが、3対2で広島が敗けた試合があります。かりに、あなたがアニ屋ファンであったとしたら、次の意見のうち、どちらに近いでしょうか。

- 1 なんとんでも勝ってもらいたかった
 - 2 アニ屋はよくやった。本人もファンも敗けたとはいえ満足すべきだ
- ⑬ スポーツ・クラブ（運動部）の生徒が放課後、運動場や体育館を独占的に使うために、スポーツ・クラブに入っていない生徒は、スポーをやるができないというような学校がたくさんあります。こういうことをどう思いますか。
- 1 スポーツをやりたい生徒はスポーツ・クラブに入ればよい
 - 2 スポーツ・クラブの使用時間を制限して、一般の生徒にもスポーツをやらせるべきだ
 - 3 スポーツ・クラブは解散させてしまった方がよい
- ⑭ 毎年、小さな運動場を2つか3つ作れるだけの予算があるとします。その運動場を、数年間、1つも作らずにおけば、立派な観覧席のついた国際試合のやれるような競技場を作ることができるとすれば、どちらを選びますか。
- 1 毎年、小さな運動場でよいから多く作った方がよい
 - 2 立派な国際競技場を作った方がよい
- ⑮ 国や県などが、スポーツをおこなうためにお金を援助する場合、あなたは、次のどちらの意見を重視すべきとお考えですか。
- 1 代表選手として、すぐれた記録を出す可能性のある選手を中心にお金を援助すべきだ
 - 2 選手中心より、広く一般住民のスポーツ活動のためにお金を援助すべきだ